

オリーブの樹

第102号

2010年11月7日

شجرة الزيتون

早期釈放！重刑策動をはね返し、重信さんを支えていこう！



目次

- P 2 8月9月10月の歌 重信房子
- P 3 独居より 重信房子
- P12 60余年分の10日間——2010年秋パレスチナの旅 O・K
- P19 無罪宣告 辻邦

重信房子さんを支える会

八月九月十月の歌

まどろみに醒めれば我が身かすかなるキンモクセイ香る病床に在り

桜葉を巡る小鳥のいたずらに一葉二葉と黄葉舞い散る

誕生日迎えた夕に移監通知旅立ち飾るか月現れる



ひぐらしの鳴く声哀しあかまんま行水暮れる幼な記憶

中秋の名月捜し立ち尽くす獄窓に届く音こおろぎ細く

惜別の尽きぬ想いのあふれ出でてじっと見つめる更待の月

幅広の夏帽子振り振りさようなら自由への旅再開誓いて

重信 房子

処暑の夕アダモの歌うインシャーラ流れて響く心の記憶

十三夜捜して立ち入る我が背より細き悲鳴の囚徒の抗い

独居よい 8月25日-11月10日

重信 房子

(重信さんは8月16日の刑執行後は通信回数枚数が制限され(月4通、1通便箋7枚)、おもに親族と弁護士宛に通信されています。その通信に日常生活の様子などをお願いしており、この「日誌」はその部分を編集室が抄出したものです。)

8月25日 今日も猛暑。「休養者」の私は「パジャマ。上着は夏期脱いでも可」とあるので丸首下着半袖になれるけど、他の人たちは暑いでしょう。囚人ユニフォームの他にパジャマとワンピースがある。しかし透けないように厚手で暑い。これはユニフォームが汚れないよう免業日に着るためのものです。休養者の私は日中パジャマでもOKなので、ワンピースはまだ着ていません。でも運動房にはユニフォームで行くので、運動房で丸首下着一枚で走っても、帰ってくるとユニフォームも下着もビシャビシャ。毎日昼食後の10分ほどや点呼後に下着を洗濯して限られた手持ちの下着で対応中です。

午後デンティストに欠けた歯などなおしてもらい、その後4時前に診察。腫瘍マーカーCEAは18・1、CA19-9は87・0と前回より下がっています。順調なので、明日から第6クールを続けてシスプラチン治療します。

8月26日 今日晴天で暑い。と言っても、私はどんなに暑くても夏は平気。アラブの40度以上の環境も平気。それでも身体中ドライヤーをあてられているようなバグダッドの夏よりも温暖のペイルートがやっぱり快適です。

今日は教育学習日とかで免業。運動なしのシャワー3分。

シャワー3分肌にこぼれる銀色の

しずくに包む現身熱し

11時、女性主任より伝達。「申請のあった再審準備用ということで、クリアファイルの使用とインデックスの使用は許可しますが、万年筆は不許可です」とのこと。昨夕の診察時、ガン治療の話を終えて戻ろうとした時、立会人の男性刑務官が、腱鞘炎の話(そのため万年筆使用願いを出していた)もしろというので話しはじめたところで、この男性が、「あなたのは万年筆かボールペンかではなく、休めばよいのだ」と断定。「あ、それって、処遇の話ですね。万年筆とボールペンではまったく痛みは違います。休むのは当然ですが、今の対症療法として要請したのですよ」と言いました。うーん、これはDr.を使って、万年筆不許可を確定

する手はずなのだと思ったのです。やはり通告してきました。もちろん、また紙に書いて再要請します。

午後一番で姉の面会です！ 受刑執行後初面会。「未決」10分のところ、「受刑者」は15分です。昨日の診察結果を話したり、宅下げ物などお互いに時間を気にしつつバタバタと話。8月は自費購入申込みは不可だったので、雑誌などの差入れ依頼。

灰色のユニフォーム着て初面会

私服の姉の水色夏色

ニュースでは小沢氏民主党代表選立候補とか。第二自民党路線に行く菅より鳩山・小沢の政策の方がまだまっとう。でも「政治と金」などや権威主義的手法など、マスコミ、ことに「親米リベラル」の朝日新聞などは叩き、国民を反小沢・菅へと扇動するので有利ではないでしょう。菅首相は「市民運動出身」といっても、方法だけで自分を飾り、中曽根路線並で小人物のように思います。

8月27日 診察時に「働けるように処遇変更休養取り消し」を伝えているので、再考するはずが来週でしょうか。今日はまだ「休養者」。未決時使用していたクリアファイルは「不許可」で廃棄させられたが許可が下りて、今日は特別購入で10枚申請(不経済)。それに再度の「万年筆使用願いの提出。「無理よ……」と言われつつ。

今日は「サイゾー」「新・原詩人」(フレディ前村というチェ・ゲバラと共に闘い、ゲバラより33日前に殺された25歳の若者の紹介が心に響いた。また「オリーブの樹」から私の上告棄却、刑の確定の件を抜粋してこの「原詩人」で載せています。)「人民新聞」8/5号、友人より写真、Yさんより「労働運動研究」8月号(Yさんの「私の戦後史」「朝鮮戦争前後の弾圧の下で」が載っています。戦後の全学連の党と学生同志のさまざまな攻防に学びます。)、
「支援連ニュース」(OMさんの治療効果が出ているようで嬉しいHMさんの報告)など届きました。感謝。またIさんが2回もお百度のうえ炊き込みお払いしてくれた二枚のハンカチ不許可で、今度は普通のハンカチをまた送ってくれました。領置なので来週宅下げしてみます。今度は

どうでしょう?! 感謝!

8月28日 休みの日。Oさんから便り、2回目、感謝。獄外の様子がわかり、ことに私の手紙の扱いなどもわかれました。

8月30日 昨日はM家のS・Nちゃんの手作り創作絵本「飛んでいくパン」というプレゼント。ありがとう。面白かったし、奇想天外! 絵も字も上手です。また「さわさわ」は9月初めにずれ込んで発送とのこと。今日Yさんよりのお便り。YさんMさんAさんと丸岡さんに23日に会いに行った様子わかりました。かなり病状は悪化しているようです。一刻も早く「執行停止を!」と祈る思いです。

午後再び「万年筆使用は許可しない」こと告知。当初は「前例がない」、次は「万年筆・ボールペンの問題ではない。手を休ませればよい」と不許可!……うーん人権無視の決定です。また時を見て再申請を試みたい。

8月31日 今日執行8/16以来初の書籍自費購入の日、3冊まで。「世界」他。受信パンフなど、「アソシエ」、「アルジャジーラ」他多数。夕方、宮崎先生よりお便り。先生は8月8日〜26日まで、国際法の学会参加でヨーロッパ各地を回ってハーグへ。「ハーブでは、早速フランス大使館を見てまいりました」と、写真ともども送ってくれました! 最後の面会の時も「ハーグ事件」現場を見てくるとはりきっておられて、こんな大きいところ制圧したのかと、今回視察の感想。先生が書いてくれたアドレスを手許の検察の冒頭陳述書でチェックしたら同じ住所です。欧州は日本みたいになすぐ建て替えない建物のせいかもしれません。74年から今もフランス大使館です。写真は未交付ですが楽しみです! 感謝。

9月1日 今日二百十日ですが台風でなく猛暑。明日点滴のため採血、入浴ですっきり。まだ働けず。

レバノンでは、イスラエルの戦争挑発がまた8月に入ってもあり、米政府が7億ドルのレバノン軍への援助をストップ。武器がヒズボラーに渡るかとレバノン軍へのヒズボラーの影響を懸念とか。それにイスラエルのスパイ網が暴露されて何十人も逮捕されています。加えて2005年に暗殺されたハリリの「国際法廷」では、当初は「シリア犯人説」で逮捕や偽証まであって、今は「ヒズボラー犯人説」です。ハリリの息子は、「レバノンを分裂内戦にさせない」と表明し、また国防相ムルは「イスラエル攻撃に使用しないという米の援助に対する条件付は断る」と言って、自ら60余万ドルを寄付して、レバノン軍へのカンパを開始。

2006年のイスラエル侵略の暑い夏同様、レバノンはホットのようです。「イラクからの米軍撤退」は、アメリカの中間選挙のセレモニーです。

9月2日 点滴は遅れて9時半過ぎに始まり。その割にはスムーズで14時くらいに終了。点滴していた左腕の血管が硬くて差し直しのうえ、結局右腕に点滴をしました。そのため利き腕でスムーズに流れたとか。本当かな。開始時の体温は37.4、血圧1.23と62。終了時は35.9と138と70。(いつもは反対に終了時に血圧は低く、体温が上昇。)今日は逆です。

点滴がはじまったところで、「監査官面談」の書類を女区主任(女性のトップ)が持ってきて説明。9月9日から10日に行われる年1回の「監査官面談苦情申立て」のためです。これは新法前には「情願」と呼ばれて、巡閲官に「情願」していたものと同じ。

今日届いた資料に「25人のアウトサイダー展」の紹介。私も出展を頼まれて、「残念ながら」と断ったのですが、その資料に、すごい素晴らしい絵にまじって、私の絵のカットの絵もあってびっくり! 「オリーブの樹」のカットらしい。平沢貞通さん風間博子さんのプロの素晴らしい絵はすごい! 下手すぎてちょっと恐縮です。

9月3日 今日はまだ副作用は出ていません。朝運動から戻って20分くらいで採血。体温36.4、血圧145と85。今日はシャツとユニフォームの交換日。ユニフォームはあまりにしわくちゃで糸がとれたりしたので上着を交換してもらった。午後はゆっくりと休養者らしく寝ていました。夕方に手紙。Kさんから、「一般面会になったらYさんと一番に行く!」とのこと。

ワシントン時間2日に、1年9ヶ月ぶりの「中東和平交渉」の顔合わせを行ったとのこと。アッバス、ネタニヤフ、クリントンの3者会議で、今後1年間、2週間1回のペースで交渉を続けることで合意したとのこと。アメリカは2000年に当時のクリントン大統領が提案した案をひき続き考えているようです。パレスチナが分裂したまま交渉を続けることも、イスラエルの入植を続けたまま進めることも、和平には向かいません。アメリカの中間選挙に向けたパフォーマンスの域を出ません。イスラエル制裁から公正な平和を国際社会が提案すべきでしょう。またIAEA(国際原子力機関、事務局長はアルバラダイから日本の天野之弥に交替)は、イスラエルに「NPT(核拡散防止条約)加盟」を求め、報告書にイスラエルの核保有を明記していくとのこと。イラン同様、査察など公正に

行うべきです。またバヌヌの国際社会との交流出国と発言の自由を!

9月4日 今日猛暑日らしい。今日は「土曜日」。8月16日執行朝にあわてて送った土曜会への便りやその後のことは、ちゃんと土曜会にOさんから伝えてくれると便りにありました。「祭」でKやRやH君、YRさんT君たち生田も来るのかなあ?!

夕方に宮崎先生より大谷先生に伝えていた執行直後のことから見通しなどのレポートを受け取って読んでくださったとのこと。旅行疲れも取れて元気な85歳! いつも感心してしまいます。

9月6日 昨日の5日日曜日は「オリーブの樹」101号の発送日と便りにあった。みんな猛暑の中の作業となったことでしょう。深謝。

昨日から水や食事がまずくなって副作用中。今日も倦怠感でまじめな休養者として寝ていました。「アッサラム」36号で泉水さんの元気な便りやプチ大通り「連赤」のアサヒ芸能コピーなどが資料が届き、休みつつ読む。夕方はMさんから。彼もガンの再発で手術しつつ元気で、なつかしいUさんの話を書いてくれています。

またTさんも元気で情報公開運動で多忙の中励まし感謝。「情報公開運動は当初バッシングや誤解も多かったのですが、近頃はマスコミも取り上げています。しかし常時裁判をいくつも抱える運動で一市民から見ると、あまりに三権分立がない現状にうかつにも驚きが続いています。むしろ素朴な驚きが集まりを盛況にしている活力の一つかと思えるほどです。根は一つヒロシマ、ナガサキ、オキナワ、パレスチナ……つながる糸から確かな現場の弾力を鍛えたいです」とのこと。たのしい活動の息吹です。昔々、1969年の教生実習の私は、ちょうど三権分立を教えていました。生徒たちと政党と三権分立の関係のテーマで話し合いました。「ぜーんぶ自民党と官僚。ちっとも三権分立してないじゃないか!」というのが結論だったのを思い出します。(教えた生徒は今50代ですね……)

今日の朝日、またまたマッチポンプの記事にうんざりです。首相には菅65%、小沢は17%。小沢出馬納得できぬ45%。親米自民・官僚たちの菅支持も広がっていることでしょう。小沢氏も今後の「政治とカネ」の仕組みを政策として語った方がよいです。「起訴されたら云々」の追及に答えるだけでなく。

9月7日 副作用が出て、食欲はあるのに食べると吐き気。消化せずの感じ。胃薬を飲みました。

今日は月2回の青天井(いつものコンクリートの天

井でなく金網)の運動房の、また月一度の大きい運動房の日です。そこには4鉢の朝顔がツルをのぼし、風に揺れながら、青、ピンク、紫の花を咲かせています。もう一つのプランターには前に植えたどんぐりのならの木がもう40センチ、私の甘夏の種からの木も30センチほどに成長していて楽しい見物。そして大汗をかきながら、広々と走ったら副作用も少しいいみたい。今日は大事な宮崎先生の送ってくれたハーグのフランス大使館の写真が届きました! 感謝。私は現場を知らないのですが、新聞の印象と同じです。知っている友人に見てもらって、これは公判資料にも活かします。でも先生の好奇心・探求心には脱帽です。深謝! またYRさんから土曜会の盛況ぶりが伝えられました。「これだけ飲んでしゃべってと感心しました。総括してもしきれないのが青春の日々でしょうか」とのこと。現役のRさんも来てみんな大いに議論したのかな。

9月8日 今日はパジャマとワンピースの洗濯交換日。入浴・運動。差入れの週刊誌で一息。午後には小菅新聞10号(8/31発行)が届きました。「オリーブの樹」99号で報告した視察委員会の意見書に対して、東拘から回答があったものを公開して載せています。「今後遅くない時期に、施設の運営の改善を図るため被収容者の方全員にアンケート調査を行うことにしました」とも書いています。東拘視察委員の活発な活動は大歓迎です。実情を把握し、社会にもオープンにし、処遇や施設の改善につなげてほしい。

明日からは2日間、監査官面談ははじまります。夕方、Mさんから「さわさわ」の遅れと朗読劇準備中!のお便り。朗読劇にエール!

またRさんからは、ステキなお便りにかまきりの絵。どうしてこんなふうの特徴もって描けるのかと見入っています。昨年亡くなった先輩は何と幸せな生涯だったのかと思いつつ。今日は久しぶりの雨の日。屋上に花一杯咲き終えた姫女苑も、ベランダの卵の花も咲いたまま水不足で枯れはじめていました。雨はいい。

ほうせんか色水遊び爪染めて
吾子らの短い影の晩夏に

9月9日 昨日の大雨とちがって晴れ間。今日は30度を下回ったとのこと。もう秋が暑さの中から近づいているのでしょう。

昼休み明け前に呼ばれて監査官面談へ。少し待たされて13時過ぎ面談。「12分」と前もって聞いていたので、4点提起。第一に万年筆使用不許可の件。でもこの回答はいつも半年後なので意味をなさないけれど。第二は青天井の運動回数2回。それも視察委の提案で

オリーブの樹 第102号

はじまった点を説明し、月4回(週一回)に増やすべし。第三は睡眠時間。受刑者は21時~朝7時まで寝ていないといけない。不健康になるので、22時まで寝床につけばよいか、または朝早めに起きて読書などに処遇方法を変更すべし。第四はいつも「希望の開陳にすぎない」と却下されているが、密封状態を改善し、回廊の外壁のルーバーの角度を1、2センチでも外が見えるようにするか、下げルーバーを取りはらってほしい。「以上ですが、時間はどうですか?」と聞くと、「ちょうどですよ。うん、まったく!」と、ストップウォッチを見せて、ちょうど005。5秒前から0へと動くのを示していました。毎年名前を名乗るのに、今度の男性は訊ねても名乗らず、「東京管区矯正局の者」と言うだけ。しかも入室待機中に、身体中を空港検査のような棒状の金属探知器チェック。やり過ぎ!

夕方にKの便り。4日の土曜会の旧友の盛り上がり伝えてくれありがとう! 写真も送ってくれて楽しみ! 生田校舎の人も多かったのね。面会にも来てくれたいとこの娘もメイも、みんな楽しんでたのですね。

9月11日 今日「9・11」。9年前、公判が4月に始まってやっと公判とはどんなものかを実感しはじめた頃に「9・11」が起きました。その少し前に、8月27日、PFLP議長であったアブアリ・ムスタファがイスラエルのミサイル攻撃によって、自治区のラマッラで殺されたばかりでした。今も続く民族浄化暗殺政策がシャロン新首相によってでたらめに実行されはじめた年です。

9・11事件は、ブッシュ・シャロンの戦争政策を拡大させる口実となり、ジェニンでの大量虐殺やイラク解体の暴挙をブッシュのデマのもとで行ったのです。この戦争の教訓や検証は、各国で問い返されるのに、日本は小泉政権の政策を裁こうとも検証しようともしません。まずもって検証を通した政治主導を! この事件は、私の公判でもひどい求刑に利用されました。現在の重刑と不可分であることを、検察の一方的な糾弾とそれに与した補充の裁判所の姿として忘れることはできません。

9月13日 今日は何の日だったろう。なじみのある日付。ハーグ闘争の9月13日です。公判で何度も語っていたので、この日は記念日!

今日は新聞休刊日で、民主党代表選の様子もわかりませんが、親米保守の官僚・マスコミの世論操作は、勝ち馬に乗りたいたい旧民主党や一年生議員を菅支持へと向かわせていることでしょう。

夕方、やっと「オリーブの樹」101号入手! 嬉

しい。なにしろ移監までの研究や学習や再審公判関連の本もなく、官本の中からマンガでないのを探し読んでいたところ。101号の新しい絵やカットありがとうございます。ゲーテの詩から? カマキリはすごい! 表紙にしたらよかった!

他に「はながみ通信」や「紙の爆弾」10月号も届きました。感謝。「オリーブの樹」で、16日の執行後の様子も載っていて、みんなに実情を伝えることができてよかったです。

9月15日 今日は点滴の日。始め血圧は92/57、体温36・4。終了時118/55、35・8。少し貧血気味。9時~15時前まで。体調は順調でした。

それにしても代表選。小沢氏も「小選挙区制」の不正を実感できたでしょう。249対51は、実際の投票では4割の小沢支持票が反映されていないからです。これを機会に「小選挙区制」が民意を反映しないもの、「中選挙区制」へと改革を願います。

9月16日 点滴後の副作用もあるが、未決時飲用の野菜ジュース毎日2~3本、牛乳1本を「受刑処遇」で飲めなかったためか便秘と体調(胃やけ腸やけ。腸が動かない感じ)が変化してしまいました。今日の点滴後の採血のあと、看護師に話して下剤の量を増やしてもらおうよう要請。昨日には「選択」「朝日」など入手。YRさんYKさん姉などの便り。

9月17日 IさんやMさんの外の実情伝えてくださってありがとう。手紙を受け取って夕食が配られ、ちょうど私の配膳時、区長が登場して突然「お知らせします。処遇が決まったので。76条第1項1号新法により『隔離』に決まったのでお知らせします。重信さんの場合、これまでと何も変わることはありませんから」と、中腰で実務的に語る。「え、何ですか? 8月18日の『処遇調査』の結果ですか?」と聞くと、「それとは関係ないです。受刑者になったので。でも何も変わりませんから」「何のこと。どうして? 通常のこと?」「とにかく知らせにただけです」とにかく意味不明ながら聞きました。「76条の内容もわかりませんが、今はこんな食事時、来週また質問します」と伝えました。言い合っても法律自身の意味不明。のちに手持ちの「監獄人権センターの法令資料①」によると、第76条第一項は「他の被収容者と接触することにより刑事施設の規則及び秩序を害するおそれがあるとき」とのこと! これって政治犯隔離か?! 他の公安事犯の人々にもこれまでであったことか? 意味不明! 3連休に入るので明けて21日に願箋で問い合わせしかない。何も知らせず決定がくる不気味な処

9月20日 今日は敬老の日、彼岸の入り、そして十三夜です。少し曇り気味ながら晴れ間も出てきました。早々とパースディ祝うお便りや励ましのお便りいくつもうれしいです。今年は10・24に京都での集会とブレ集会のさまざまな集いの様子。また9月12日の第36回大阪のエイサー祭の様子などありがとう! 舞や太鼓や三線に酔い、ゴーヤチャンプルーやサーターアンダーギーに舌鼓をうちつつ。え? もちろん私もポークは食べますよ。イスラムではないし。でも魚の方が肉よりも好きです。「出所のあかつきにはオリオンビールで乾杯を!」とのこと。必ずね!

9月21日 今朝、願箋を出しました。「カクリ」の件。9月17日の実情(法の説明もなし)を記し、2点の質問をしました。第一には「76条第一項一号とはどんな趣旨で制定されたのか? どのような場合に適用されるのか? 私はなぜその対象か。第二は、私は9年半東拘に生活し、一度も懲罰を受けたこともない。むしろ積極的に協力し規律も遵守してきたことは、女区の職員に聞いてもらいたい。それがなぜカクリなのか、具体的に教えてください!」というものです。またKの送ってくれた土曜会の写真! みんなの笑顔! またYRさんの原稿届きました。暖かい目差しに改めて幸せだった幼い時をなぞっています。夕方には「さわさわ」12号の試作品をお便り。飛び回る多忙さの中での発行感謝! 表紙Hさんのいいですねえ。文章もじっくり読みます。Yさんの活動歴の深さには圧倒されますね。読みながら「さわさわ」は私にエネルギーを届けるなあと思います。

今日のニュースで菅内閣副大臣なども決まってスタート。なんだ前原内閣じゃないかという路線。尖閣列島の係争中の「領土問題」を突如「国内法で裁く」のは日本側からのグレードアップの挑発に見えるでしょう。官僚思考の矛盾の拡大。また大阪地検特捜部の証拠カイザン。驚きはしません。体質化された驕りです。私の公判でも供述書の改竄(助詞を加えて意味を変更)「カルロス証言」の意図的誤訳によって時制をごまかすという彼らの犯罪を経験しました。それを訴えても一顧だにしない裁判官も私の時には共犯でした。大阪の件は個人の問題でなく、検察の犯罪として公開的に刑事公判で追及をしてほしいです。

9月24日 問い合わせ依頼どうなったのでしょうか。連絡などこちらから出せない分困ります。検察は前田主任検事を逮捕。組織ぐるみでシナリオに合わせて成果を誇り「正義」の独裁を続けてきた破綻です。1月に「書きかえたい」と知りつつ、特捜部長も「問

題なし」としてきたのは、これまで日常的にやってきた基準で判断しているからです。特捜は不要。検事総長は国会承認とすべし。検事の最高裁などへの天下りは廃止せよです!

四方田先生お健康ですね! 聖ペテルブルクからのお便り。「全編ロシア語で制作された満州映画の謎にとりかかっています。満州には謎が尽きません。いずれ第二の満州としてイスラエルは滅びるでしょう」とある。

9月27日 昼食直前、区長から呼び出して会議室へ。「前の質問に当施設側から回答が来たので知らせます。『回答の限りではない』というのが回答です。でもそれでは重信さんも不明なので、76条第1項1号を説明します」とのこと。(すでに六法を借りて読んでいたのでその旨説明)当局の答えには嘖然! 「不服申立」など弁護士面会含めて考えたい。午後明日が私の誕生日なので姉の面会。夕方にはTさんUさんYさんらハッピーパースディと外界の近況深謝。

9月29日(特別許可の便箋2枚) サプライズ! 今、八王子医療刑務所に居ます! きっと驚くでしょう。ちょうど9月28日はハッピーなパースディでした。27日に姉も来てくれて、28日にはメイも会いに来てくれて、祝!とアクリル越しに手を合わせました。友人たちからも祝電報やハガキお便りで何人にも祝されて、みんなの支えの中で生きてると実感。それに「受刑者」としての初のパースディで、東拘でもかりんとうを誕生祝いにいただきました!(午後の休憩「10分で食べるように」とのこと。半分くらい食べた!)

メイの面会から房に戻ったところで、「領置調べなので、すべての私物持って!」と言われて、あーやっぱり9月中ね! まあ65歳の誕生日の再出発と心得ました。すべての荷物を明日用に整理して夕食を遅れて取り就寝。夜中起きてみると美しい月が渡っていくところ。移監先が関西なら明け方だな……と思っていた夜が明けても来ない。起床も普通なので「ああ、栃木刑か」と思っていました。朝食後お世話になった係がわざわざ別れのあいさつに来てくれて、着替えに領置室へ。そこで女区長より「ただ今より八王子医療刑務所に移監します」と言われてびっくり。

大型バスで移送は一人。女区長と女区担当2人に看護師男性1人、警務男性3人で8時半出発。車に酔って少し吐いた。10時近くに府中国立を経て到着。

第9信 10月5日発信 八王子医療刑務所より

29日に移監され週末となりまだよく理解していない点多々ありますが、10月3日(日曜)現在の私

の実情をお伝えいたします。

①入所の様子9/29

到着時、所長？副所長が出迎え（大阪医療刑務所は医者が所長だったがここは不明。医師、制服数人）。車椅子が待機し、「歩けるので不要です」と言ったが、「乗って行くように」と言うので、バス酔いで吐いていたので、みんなも心配しているの仕方なく車椅子で建物の中へ。小部屋に通され、手錠を外し、その後、迎えに出ていたユニフォームトップの人が人定質問（生年月日、本籍などや刑の満期日）のうえ、当施設で規律を守り、身体を治して早く健康で他へ移るようにと訓辞。その後、当施設から親族に連絡してもらいたいかな否か他の係が登場。「お願いしたい」と書面に姉の住所を書いて提出。（9月30日夜に、姉より当施設に電報返信があったので、一日で届いた模様。）

その後、写真撮影（前と横顔）して、私服からユニフォームへ着替え。私服を持って領置品調べ室へ。ここで数人の係員が東拘から持ってきた荷物を、公判用、パンフ類、写真類、日用品と分けていき、衣服下着のみと受信物と日用品ノート一冊などはプラスチックBoxに入れて、本人持ちでそのまま居房持ち込み許可し、他の物は検査のうえ後に交付とのこと。プラスチックBox（50×38センチ、高さ17センチ）を持って居房に行く前に身体検査（身長、体重、検眼、血圧）をして居房棟へ。そこでプラスチックBoxの中から使用する下着に名札を付けるとかで（ここでは番号はあっても姓で呼び名札も付ける）、パンツ3半袖下着などを選んでる時に診察。

担当医は50代の人、それに不在時の担当になる医師と二名が自己紹介のうえ、私に症状について説明を求めたので、ガン発覚以来今日までの抗ガン剤治療とCT、内視鏡検査を説明。「現在は小腸ガンをターゲットに治療中」と説明。医師は患者の理解度を確かめたかったようです。誠実そうで、東拘よりもインフォームドコンセントが徹底しているようで、大阪刑の医師団のようにきちんと説明してくれています。（翌30日にはすでに心電図、脳波、胸・腹レントゲン検査を朝に行い、午後にはその写真を説明しつつ異常移転が見られないことを説明してくれた。）また東拘の第6クルールの結果は（移監の9/29が診察日）聞けてないと私が告げると、9/30には腫瘍マーカーの数値を教えてくださいました。CEAは20・4（前回18・1）と少し上がってしまっているが微動なので問題ないこと、CA19-9は80・8（前回87・0）で下がっている。蓄尿で一日の尿の量と内容検査、血液検査の結果を受

けてから、第7クルールのシスプラチン抗ガン剤治療を10月に入ってから行うとのこと。これは9月30日の診察時の話です。

房は畳ではなくベッド方式。古い小菅の時のように窓の外には桜の木が目の前にあってうれしい。房内には「所内生活の心得・日常の注意事項」、視察委員会の「小安町通信」9/28 6号が置いてあり、また「洗濯時の破損」や「新聞購入したものの必要時削除」の承諾用紙など準備されていた。（「子安町新聞」は患者と現場職員の声から改善を提起していて興味深い。許可を取ってそちらに送れるようにしたい）

私は担当の人に9月中に4通発信可のうち、30日に4通目を出す計画だったことをまず伝え、すでに書いていた7枚に増枚願いで2枚を加える手続。新聞を10月から特別購入したい手続、その他の多くの願書と面会時・文通時の親族（10人）、親族外（とりあえず弁護士、恩師、友人ら28人）の「許可願い」など、終日書き込み作業やパジャマユニフォームになり、入浴、諸々の注意に明け暮れました。30日には検査と診察などや書き込み作業と続き、夜には姉の電報と東拘から転送された四方田犬彦先生のお便りまで受け取りました。（四方田先生は聖ペテルブルグから帰られたのですね。それに10月10日のパレスチナシンポジウムと11月4日の張承志氏の訪日まで知らせてくださって感謝）移監してもみんなとつながっていることを実感して感激と元気です。

②処遇について

「隔離処遇」ではありません。ここではみんなと同じ扱いです。9月30日に、制服トップの責任者が舎房に来て伝えてくれました。（すでに前の手紙で書きました9月17日の東拘での「カクリ」処遇について、「不服申立を矯正局の方に行うことにしましょう。落度もないのに、憲法に反して思想差別ですからねえ」と話していたところ、9月29日の移監です。うーん、東拘を告発できないということになった……）そして10月14日に、監査官面談がこの八王子刑で行われると言われたので、すでに東拘のことは過去のことで矛を納めよるべきかと思いましたが、監査官に「苦情申立」を行うことにしました。東拘の現場の人たちにも説明なしの「指示」で気の毒でした。

③環境

東拘に比べて大変過ごしやすいです。居房は4階で窓の外は桜の葉が繁り、朝は鳥のさえずりで起き、窓も開くので外気が気持ちいい。筆記用具も東拘のように取り上げられず、24時間持っています。日課も7:

30起床。看護師がお通じや尿の回数など体調を聞きに来ます。8:10朝食。9:00-11:00安静（ベッドに横になって本を読むのは自由）。12:00昼食。13:00-15:00安静。16:40夕食。17:00点呼。21:00就寝です。「安静時」は読書、他の時間は書き物など作業もできます！ 食事東拘の油だらけの食事と違ってバリエーションもあり、生野菜果物ヨーグルトなど美味。それに10日毎メニューを事前に回覧してくれます。

処遇は「カクリ」でないために普通に10月4日の運動会参加（競技参加するか？と聞かれて派手に応援団でも高校時代ぶりにやるか！と思っただけ、女子は少なく静かなものとか。見学団にしかありませんが）。茶道や習い事やTVもビデオ鑑賞ありとこと。これからは楽しみです。面会は20分が通常で、30分以内月に2回で、東拘の15分より少しよいし、発信は毎月4回ですが火、木、金の発信日があります（東拘は木のみ）。ネガティブな点は運動。まだ運動場に行っていないが、建物内で「走るものではない」とのこと。一日2回15分の室内体操は床でなくベッド上でやるようにとのこと！ ベッドの上で規定の柔軟体操（東拘の午後の室内体操と同じ）や腕立て伏せまで！ 危険です。これは願書を出して変更して床に立って体操を求めたい。（P・S10/4ラジオ体操を床に立ってやるのOK!）

④医療について

恵まれた治療条件です。すでに記したように来週造影剤入りCTや血液検査の結果を経てシスプラチン第7クルールを小腸ガン治療として再開する予定です。

⑤東拘からの物品交付

すでに9月29日には公判準備の手持ち書類は返却され、10月1日には東拘で未交付のまま八王子へ送られた本も入手。『日本赤軍世界を疾走した群像』（9月15日発行、図書新聞）も入手。ざっとしか見ていないけどインタビューの小嵐九郎さんのリードが、この本を一つの方向に導いて、志を浮き彫りにしていますね。小嵐さんの一首「ものがたりものかたりだよそのむかし犬死に惚れた青年たちの」が聞こえてきます。（校正洩れ106p81 PFLP本部ではなく、日本の本部、117p左31和光さんはすべています→）

また「THE寂聴」12号も交付されました！その中に書き下ろしの連作短編「風景一面会」の文を見ました。私が最高裁判決を受けた後、寂聴先生が東拘に面会にみえた日のことから、大谷弁護士、永山則夫、

永田洋子さんらのことも。寂聴先生の決して自らを上になれない視線、他者を見る筆の暖かさ、他者を引き立てる力に圧倒されます。慈愛の自然さでしょうか。この八王子にもまた来て下され！ 私も会いたいですけど私より療養中の受刑者に法話を！と思わず描いています。

10月4日 CT検査と姉夫婦の面会が重なり姉を待たせたのですが、担当医2名がちょうど姉夫婦とも会って、ていねいに説明して下さったと、姉は大安心でした。またNさんをお願いした「フォーリンアフェアーズ」No.9と同誌「アンソロジーNo.32」届きました。この「フォーリンアフェアーズ」は昔は政策論争、今はプロパガンダの傾向ですが、世界の側から見るのには、日本の新聞では不足していたのでありがたい。初期にはトロツキーも寄稿していましたが、今はシオニストの論調中心です。でも、ためになります。批判精神を鍛えるのに。感謝。

10月6日 診察があり、八王子に来てから9月30日に採血した腫瘍マーカーの数値を聞いて驚きました。9月30日採血分は、CEAが20・4（9月21日採血）から3・2に再上昇してしまいました。移監で薬を一週間ブランクにしていることと関連するのかわかりません。とにかく体内にガンは棲息して居場所がつかめない（小腸は長い！）のが現情です。それでも10月7日からシスプラチンの第7クルールをはじめます。TSIを服用し、10月13日と10月25日か28日に2回の点滴をする予定です。今日は姉の差入れの靴下やチリ紙、頼んでいた辞書雑誌など届きました。アラブ時代に資本主義の政策論争を知る一つの資料そしてずっと読んでいたものです。

10月7日 今日は運動会。晴天！ 早めの昼食後、12時過ぎから、赤いジャージ上下に運動靴に着替え、私たちの棟の裏の運動場へ。萩が満開です！ すでに100人をこえる白、緑、赤組の男性や、白衣制服の数十人の人。所長と来賓が到着して開会宣言。私は日本不在で、何十年ぶりの運動会です。小学校時代のようちちゃんとテント（来賓用）も入場門もあります。私は勧められつつ見学としましたが、女区11人は果敢に挑戦。女区をのぞいて男たちは競争、綱引き、応援合戦、リレーと競い、男子白組炊事配膳組が優勝！ 各競技一位はノート1冊、二位は便箋、三位は石けん、参加賞は鉛筆各1。15時過ぎに閉会宣言。みな楽しそうだし走るのも早い速い！ 病人受刑者がほとんどなのに大した健闘です。やっぱり楽しい。スナック菓

子に飲み物も出ました。

終わって房に戻って少ししたら、「面会！ 弁護士さん」とのこと。あれ？！ 予定はなかったけど。「ノート携帯」も「時間延長」も「事前申し出がないのでダメ」とのことで、「せっかくの月2回の面会なのに！」と思いつつ、「大谷弁護士です」と聞いてとんでいきました。

「うわあ、ありがとう。NO.9手紙着きましたか？！」「着いたけど、今もう時間ないので少しだけ。おととい丸岡さんがこの八王子に移監になって、今一時間ほど会ってきたところ」というので、びっくり！ 「執行停止すべし。それまで医療刑に改善の策として早く！」とNO.9でも書いたところでした。でも2009年は丸さんが八王子に居たせいか、私は大阪医療刑務所だったけど、今回は二人とも八王子。でも外の救援や見舞いの人には、同じ場所はプラスでしょう。丸さんよかった！ きっと例の「大阪特捜事件」で大阪には送れず（高裁検事の裁量指揮下の処置で、私は大阪医療刑務所に行った。今は「最高裁棄却」を経て、検察のどこの命令かは不明ながら）異例ながら八王子に「日本赤軍」2名になったのでしょうか。

とにかく近くで仲間が健闘中を実感するのはうれしい。驚きの報告。そのうえ大谷弁護士の面会は「病状に関する特別接見」で今回の面会は「月2回」にカウントしないと聞いてまたホッ！ 大谷先生は急ぎのため20分足らずの面会でしたが、とても励まされました。丸さんも執行停止めざし一歩でも改善を！

先日HMさんからお便りで、八王子は旧いし規則もうるさいのでは……案じたお便り、大丈夫元気百倍ですよ！ またMさん、いつも資料ありがとう。Uさんいつもお便りありがとう。

10月8日 今日晴天。43年前の晴天の京浜大森海岸駅から高速を逆に駆け上がった「10・8」を思いつつ、小鳥のツンツンと跳び交う桜の大木を見つめています。11時頃、「処遇調査」。健康状態、身元引受人の条件など。さらに「当所での目標」として2点を提示されました。「①心身の健康増進のため積極的に治療に取り組む②自分の罪に対する反省の気持ちを持って規律に従って生活し、健全な生活態度を身につける」。この②の点「自分の罪に対する反省」について質問し、私の「ハーグ事件」冤罪・無罪主張は、上告棄却でも変わらず再審準備したい点、公判では私たちの過去の活動について謝罪しているが、政治的社会的責任においてであって、罪は旅券不正使用のみのことなどを簡単に説明しました。それらはそのとおりでかわ

まないし、無罪主張を続けることもかまわない。今言った反省の内容において、当所規則にそって生活していくことでよいとのことで、目標2点を確認しました。

夕方にはソウルから四方田先生のお便り。韓国光州での日韓関係をめぐるシンポジウムに出席とのこと。アルジャジーラ他資料も届きました。感謝。あ、それから10月6日からベランダで運動可です。素足で初めて走ったら翌日から不可。申請して10月8日から運動靴を貸してもらいました。でも走るのはダメで、青空の下、柔軟体操と歩き。空は金網なので、秋の雲も見えます。それから10月5日にテレビも見ました！ 録画の「疲労や過労死対策」のタモリの番組。いろいろ新しい体験！

10月12日 スペース不足のため、3連休は省略。今日午後TV録画、週一回の娯楽番組も「クローズアップ現代」みたいなものはないそうです。SMAP「超豪華世紀のライバル対決」。夕方には宮崎先生四方田先生KさんSさんYさんらのお便り。東拘から移監でバタバタしている間に、特捜部長逮捕。「特捜部」だけでなく検察の全体が同じ体質化されたストーリーを作ってそれに合わせて供述書を取り、公判でも脱法行為デッチ上げや証拠隠しをもっと知ってほしい。週刊朝日10/15 青木理氏の告発記事はよかった。小沢氏強制起訴。中国、北朝鮮、ノーベル賞と外界は興味深いことばかり。何十枚でも書けた「未決」と違って書けません。

10月13日 今日は点滴の日。10時過ぎから東拘と同じように①ラクディアG500ml②吐き気留め入り100ml③シスプラチン入り500ml。右手の点滴。点滴開始後すぐ初の房内検査で、点滴バーを持って外の丸椅子に座って待ち。ノート検査もあり。順調に15時に終了。その後宅下クロネコヤマト手続や手紙。Uさんから本資料届きました。四方田先生の『人、中年に到る』、「人民新聞」も受取り、まだ副作用なく快適な夜になりました。ちょうど友人から秋の虫の鳴かない異変のお便りでしたが、ここは今も窓を開けて高尾山より少し西の山脈を見る夕間暮、邯鄲が鳴いています。

夕間暮窓辺に立てば樹の匂い
深呼吸すれば邯鄲も鳴く
秋涼し枝垂れて並ぶうす紅の
萩爛漫の獄の裏庭

明日14日は監査官面談。東拘の「カクリ処遇」を申し立てます。

10月14日朝 午前中「監査官面談」がありました。50〜60歳代の穏やかそうな人。東拘における「処遇の不当性、八王子ではカクリではないことを第一に苦情申立て。第二は東拘で29日消印の私への受信物を「受取人不在」で八王子転送せずに差出人に返送していたこと。に聞いていました。でもこの10年一度も受け止められず、いつも「不採用」「希望の開陳にすぎない」などと返答でしたので、今回もその類かもしれません。午後、朝に投函手続きした第10信が差戻され指導を受けました（ここではあやまちや正を指導されることを「指導される」と言います）。第10信に私が所内規定に違反して「当施設の他の人のことを書いた」ことを指摘され、その名前の除去を求められました。午後は茶道の予定楽しみでしたが中止で来月です。

10月15日 今日は教育処遇の日で、「はやぶさの帰還」の科学の話。とてもおもしろいものでした。午後にはメイの面会、昨日の指導の件があったので、メイが話をしたらどうなるのか訊いたところ、私から話すのは不可だけど、相手が知っていて話題となるのは拒めないのが適切にということのようでした。もしそのようなこと（「指導」で指摘されたこと）がなければ、当然彼の10月20日のバースディや還暦の話は出たのですが、逆に話がむずかしくなりました。メイも前もって予定を伝えてくれていなかったで、「ノート携帯」など事前申請なしはムリのところ、身元引受人のメイに保護司が訪ねるために自宅を詳しく聞くことで許可してもらって初面会。元気そうで今は論文作業の追い込みで多忙のようです。今夜こそ月を探そうと上弦の月を探してみたけど見つけれず。高尾山の麓に眠る両親の墓の方にあいさつ。

10月16日 副作用は昨夜から胃腸が「胸やけ」ふうです。今日は夕食後に胃薬をもらいました。それでも第7クールでなれているためか、これまで一番軽いリアクションで、ムカムカも少ないのでホッとしています。「フォーリンアフェアーズ」10月号の送り状やお手紙に感謝。関西の活動の様子もわかってありがたいお便り。それに尖閣諸島の井上清先生の論文も同封くださってありがとう。（昔、パレスチナ旅行団でベイルートに来られた先生が「日本赤軍が孤立しているとしたら、それは、日本の闘争者たちの自分を含む自己批判として語られるべき事柄だ。」とおっしゃったこと過分な励ましと嬉しかった時を思い出しつつ読みました。）井上先生は「尖閣諸島は中国領土」という立場なので、国境よりも共同こそですね。どの国境

紛争でも。またTさんの資料は身近な友人たちの様々な様子がわかってとてもありがたかったです感謝。また四方田先生の新著『人、中年に到る』を読みました。昨年脳の大手術を経て、これまでの自らの世界をフィールドとした実体験と問題意識を現地平から鳥瞰する目で、身近なことに絡めて記しています。「花について」「老いと衰退について」も記しています。そしてかつて送ってくださったマルクス・アウレリウスの「自省録」の言葉「あたかもオリーブの実が熟し、自分を育ててくれた樹に感謝しながら大地に落ちるように、また枯れた葉が幹から自然にはがれ落ちるかのよう、人は死を体験しなければならない」。つねに毎日を人生で最後の日であるかのように誠実に生きようという教えを自らのターミナルを見通して記している四方田先生の姿がうかがえます。

10月20日 Iさんのお便りありがとうございます。朗読劇も「さわさわ」の発送も。宮崎先生、85歳祝！ 10・21の反戦デーと同じ日（10・20は、愛する友人の還暦祝い）宮崎先生は18〜21日まで韓国とのお便り、相変わらずのご活躍。健康第一と祈ります。午前中に雨が降りだしてベランダの運動は中止。午後夕食前に診察、CT検査の結果を知らせてくれました。脳、肺、肝臓は転移なし。卵巣に骨と同様の成分があり、婦人科の診察が必要。21日に血液尿検査の上、10月29日（水）に第7クール2回目の点滴を行う予定です。Mさんの手紙も「さわさわ」12号も届きました。関西10/24成功を！

10月21〜23日 準備待機と採血、検尿しましたが、婦人科医はCT写真チェックのみで、次回外来時ということになりました。患者が多いので時間がなかったのでしょうか。フォーリンアフェアーズ10月号、選択10月号、救援498号。22日にはサイズー11月号、人民新聞10/15号。23日にはYさん、宮崎先生、Uさんのお便りを受け取りました。

10月26日 深夜に木枯らし一号が吹いたという。本格的寒さ。八王子は盆地で冬は寒いとのこと。今日はコーラスに参加しました！ 朝、「午後コーラスがあります。参加しますか」というので、「もちろん！ お願いします！」。10年来、歌う機会も思いきり話す機会もない分、喉は劣化し、どんどん低音化しました。ちょっと挽回しなくちゃ。午後1時間、すごい先生に圧倒されたコーラスでした。80歳の女性ソプラノ歌手。背は低くふくよかで、大音量とプロの劇場の歌と指導。まず発声、ドレミファ体操から「翼をください」の歌唱指導。エネルギーで若々しい迫力に満ちた

オリーブの樹 第102号

美声。教えるプロのリードにみとれました。日本にいなかったので歌詞・メロディー知らず、楽譜と歌詞を読みつつ、高音は出ず、必死に力一杯の張り上げた声で汗をかきつつ。「もみじ」と「歌の力」の3曲。あつという間の1時間。思いきりの発声はいいですね。病室に戻ってさらに発声練習していいですかと聞いたら、やっぱり不許可。月1回のコーラスです。

10月27日 今日第7クール2回目の点滴。DrからCTの卵巣の腫瘍について、産婦人科医の所見を伝えてくれました。今のところ4センチ(卵巣)くらいで、良性と思われるので経過観察を続けるとのこと。摘出となると、抗ガン剤治療はストップして手術しないといけないとのこと。次回の腫瘍マーカーチェックに卵巣チェックも加えるとのこと。その後Drが針を入れて点滴。15時前に終了。夜はいつもですがのぼせるため、アイスノンで冷やし寒い。

10月29日 昨日はTV鑑賞。5人のお笑い芸人のハンバーガー喰い。こんなTV、世界とかけ離れてるな……と、かけ離れた世界の私が見ています。今日は室内検査。東拘時代より房内の生活のし方に細々と規律があり、毎回何か指導を受けてしまいます(ごみの捨て方や物の管理)。今日は先月来悪化していた腱鞘炎のためサポーターと万年筆使用許可。ありがたい! 東拘では未決時は万年筆OKで、「受刑囚」になって、痛いのですが「前例がない」と不可。何度も、また監査官9月面談でも提起したまま移監でした。こちらに来て、Drや処遇の許可を得て、領置品から取り出せば使えます。ホッとしました。

60余年分の10日間——2010年秋パレスチナの旅

9月30日にヨルダンから陸路パレスチナに入った。日本の暑さに慣らされていたためか、それほど暑いと感じなかった。夜エルサレム着・泊。

パレスチナ産のオリーブオイルやザータルやビールを輸入しているM君が募集している旅行グループに入っている3度目の訪問である。訪問地は、参加者の希望地なども含めて、M君と彼が取引している農業団体(UAWC、Union of Agriculture Work Committees)とでアレンジしてくれている。M君はパレスチナの生産物の販売を通してパレスチナとの連帯を思っている人だ。

翌日の10月1日は金曜日で、パレスチナの金曜日

10月30日 台風が近づいているとかで、目の前の紅葉黄葉しはじめた桜の大木は梢からゆっさゆっさと大揺れ。4階なのでちょうど梢に近く圧巻です。樹と風の格闘を飽きず眺めています。夕方、後輩のYさんよりブログに載せた「面会記」や明大闘争の資料が、図書新聞社の『日本赤軍!世界を疾走した群像』の出版記念パーティの様子などお便りと共に受取り感謝。また大阪のTさんより「10・24反戦反貧困反差別共同行動 in 京都」の様子。降りだした雨をものともせずつわものたちのデモ行進! これから11・28の沖縄知事選を焦点に、5・28日米共同声明撤回の民衆行動がAPEC、オバマ来日と良い道を育てますように。

11月1日 夜来の大雨があがり晴れ間。遠くの峰が水墨画のように幾重にも雲から頭を出して美しい。今日、万年筆もサポーターも届きました。痛まない程度に文章書けそうです。ここは病院で病室(個室ベッド)のため、大阪の医療刑と同じ椅子は直径2・8センチのプラスチックツールです。座って文章を書くのは座り心地は悪い。寝るとこのツールで食事するのが基本のようです。きょうは診察、明日は血液検査とのこと。その際現在のシスプラチン治療が効かない次の段階の薬について尋ねました。次は「5Fu」に他のものを組み合わせてグレードアップする方法となるとのこと。またDrは、私の知人・友人のDrから提案治療に関して意見があれば検討するとのことですので、メディカルレポートから旧友、医者意見もどうぞ知らせてください。

O・K

はモスレムの休日であるが、イスラエルに土地を削り取られている地域や町や村で、土地収奪・占領への抵抗・壁建設反対の非暴力のデモンストレーションが行われる日である。

その一つであるピリン村のデモに参加すべく、エルサレムからラマツラ経由でピリン村に向かう。

エルサレム市全域は、1948年建国時に西エルサレムを軍事占拠したイスラエルが、67年に東エルサレムを併合して首都宣言して以来、イスラエルが軍事支配しており、パレスチナ人はエルサレム市の出入にはもちろん検問所を通り、旅行の外国人も検査されるし、年によっては検問所を通る。

今年は外国人旅行者であるぼくらは、バスの中に乗

り込んできた自動小銃を抱えたイスラエル兵のパスポートチェックを受けたただけだったが、昨年はバスを降りて検問所の回転鉄棒のある狭い通路を通らされた。しかもひと時に多人数を通さないために、2、3人通ると回転鉄棒は回転しない仕組みである。やつと通路を通過して検問所の向こう側で待機しているバスに乗り換えるというひどい不便を強いられた。

一昨年も昨年も今年も、パレスチナ人は全員バスを降りて検問所の回転鉄棒の通路を通らされていたから、パレスチナ人に対するこの検問システムは常態なのだろう。もし職場が家がエルサレム市あるいはエルサレム市外にあれば、パレスチナ人は毎日通学・通勤の朝晩にこの不条理を味わうことになる。

この検問所がなければ、エルサレム市とラマツラ市は30分弱の距離であるが、この検問ではほぼ15~20分を加算される。このひどい状況が60余歳のパレスチナ人には60余年続いているのだ……。

イスラエル建国時、パレスチナ人たちはイスラエルによって武力で住んでいる町や村、家や土地から追い出された。その数は72万6千人(国連推定)とも、85万人(パレスチナ側推計)ともいわれる。その時点でパレスチナの人口は141万5千人で、その半数以上のパレスチナ人の家・土地などすべての財産をイスラエルは奪ったのである。なおこの時点のユダヤ人口は65万7千人(後年のイスラエルの統計)だった。そのパレスチナ人の帰郷あるいは補償を国連は何度か決議し勧告したが、イスラエルは一切を無視して今日に至っている。

現在のイスラエルの領域が示しているように、イスラエルはイギリスの委任統治が終わる48年5月14日をめざし、軍事勢力を海岸部や平野部の主要都市や交通の要衝に配置し軍事占領したのである。武力で追われたパレスチナ人たちは、東の山地やガザ地区、レバノン・ヨルダンなど隣国に逃げた。ヨルダン川西岸の山地はオリーブ栽培や農業が主要産業で、その西岸のどの都市や町や村の周辺には、その難民の住居地(難民キャンプ)が今もある。テントからはじまり今には2、3階建てのビルもある。なにしろもう60余年、そこで生まれた世代も老年である。

イスラエル側が“独立戦争”、パレスチナ側が“ナクバ(災厄)”と呼ぶ第1次中東戦争は、イスラエルの建国に対して、翌5月15日にアラブ連合軍が侵入して起こった、とイスラエルの宣伝によって通説化されているが、実はそうではない。

48年の4月9日の夜から翌朝、エルサレム近郊のデイル・ヤシーン村の村人254人が、ユダヤ人軍事組織によって虐殺された。幼児・子どもから老人までの男女である。生存者は血の付いた服のまま、見せしめにエルサレムの街を行進させられた。「ここにいるところなのだ」という宣伝である。5月14日まで多くの村がユダヤ人軍事組織に襲われた。これを聞き知っていた人々は家に鍵をかけて、東の山地や知人を頼って隣国に逃れた。

イスラエルはつい10年ほど前まで、「アラブ人はアラブ側の呼びかけで家や土地を捨てたのだ」と言っていたが、近年になってイスラエル内部からその嘘と事実が次第に明かされはじめています。

この日(10月1日)のピリン村のデモは、昨年の200人ほどから比べると少人数で、ヨーロッパ系の老婦人たちのグループが先頭に立った昨年のデモは心強かったが、臆病なぼくは終始後方で「Occupation no more!/Free free Palestine!」と唱和して歩いた。イスラエルが奪い取った土地の先端に作っている警備兵舎まで、横断幕を先頭に500メートルくらいの村道を唱和しながら歩く。石を投げるために子どもたちは付いて来る。

以下はパレスチナ側対イスラエル側の領土比である。43・5%対56・5%(47年国連分割決議案、エルサレムなどは国際管理地)、0%対約77%(49年第1次戦争停戦時、西岸はヨルダン領・ガザはエジプト支配)、0%対100%(67年6月第3次戦争停戦時)、23%対77%(第3次戦争停戦5月後の11月22日の安保理決議を受けてイスラエルが撤退した時点。ただし23%には88年にヨルダンが統治権を放棄した西岸を含む)。その後この23%は入植地や壁によって削り取られ、後記するイスラエルの行政・治安権を持つ地域などによって、現在はイスラエルが05年に発表した壁計画完成時の12・4%対87・6%に近いだろう。

日々報じられるイスラエル兵による殺害、08年末から09年のガザの死者1330人、負傷者約5450人、死亡者半分以上が一般住民、437人が16歳以下、110人が女性など……。切り倒され抜かれたオリーブの木は100万本ともいう。

150人くらいのデモ隊の後方で、ぼくはそんな数字を思い出していたわけではない。そして「Free free Palestine!」と唱和した時、突然に鼻奥と目頭が熱くなり、のどが震えシュプレヒコールの声が出なくな

った。
警備兵舎が近づいた。気付くとかなり前に出ていて、と言っても、40メートルくらい先の兵舎のイスラエル兵の顔も識別できない距離があるのだが、マイクがとぎれた合間に、ひとりで「Occupation no more! / Free free Palestine!」と叫んでいた。その声が自分でも震えているので、少し恥ずかしくなった。やがて、鞆状にスポンジで被った催涙ガス弾がぼくらの前後左右で飛び跳ねる。催涙弾はラグビー球のように着弾地の形状によってどちらに跳ねるかわからない。青白いガスに包まれ、涙ながらに蹴散らされて退却した。集落の店屋で水をもらって目を洗い、グループの顔を確認していると、一昨年エルサレムの宿で知り合ったM子さんがいた。昨年にも会ったので一年ぶりである。翌日からのタイベ村の祭りにぼくらが出すたこ焼きの手伝いに来るのだという。他に、ニダールさん(映画「パレスチナ パレスチナ」の主人公で、一昨年も昨年も家に招いてくれた友人)たちと合同演劇するためにパレスチナに来ているS氏らもいた。この日のデモにはおそらく日本人が20人はいたはずである。

2日、3日はタイベ村のビール祭。タイベ村は人口1300人くらいのクリスチャンの村で、この旅行のコーディネーターM君はこの村の産業であるビールを輸入しているので、年一回の生産者との顔合わせである。

日本政府の援助で造られた村役場の建物には野外ステージ付きの広場があり、折りたたみ式の400席くらいとその周りを取り囲む立ち見の人で満杯である。10代の男女の民族舞踏ブカダンス、人形劇、ロックパンクバンドまでである。クリスチャンの村なので少ないが裾の長いコートのお婦人やカフィーヤの老人、母親に連れられ舞台前面に陣取った子どもたちはキラキラと目を輝かせている。大人も楽しんでいるので今日一日は子どもたちも安心しきっているように見えた。



オリブ実り日差し柔らかくタイベ村
つづけよ祭この子らの上に

などと、歌ができてしまった。
3日の夜にはタイベ村の祭からラマツラにとって帰って、パレスチナと日本の俳優たちの合同公演の「アザリアのピノキオ」を観た。パレスチナの詩人マブムンターは結構な入りで、10代の少女たちが多かった。芝居がはねてニダールさんたちに挨拶して外に出ると、なぜかその少女たちに取り囲まれた。一騒動である。ぼくも調子に乗って、「I love you」とみんなに話しかけたが、少女たちは大笑いで肩を寄せ合い楽しんでいるだけだった。なぜあんなに少女たちに囲まれたのだろうとあとで考えてみると、何のことはない、彼女たちはぼくを日本人俳優の誰かと誤解したのだろうと気付いた。でないとなあんなに理解不能である。しかし20人近い少女に「I love you」と言って投げキスをサービスしたのだから、ぼくの奮行も国際親善として許されるだろう。

これは、旅の最終日にパレスチナ自治区の西岸から出て被占領地に入り、地中海に面したテルアビブに行ったのでしっかりと目にしたのだが、イスラエルの占領している海岸沿いの地域はまったくの平野である。パレスチナは08、09年と訪問したが、自治区の西岸が主だったので、イスラエル占領地も西岸と同じように丘陵地だと思っていたが、実は地中海の海岸寄りには車で1時間くらい走る距離は平野であり、自治区西岸から海岸に向かうと気圧の変化で耳奥が詰まる。すなわち自治区西岸全体が300メートル前後のすでに高地なのである。

訪ねたイスラエル占領地のナザレ、テルアビブは別にして、その山地の自治区西岸の、今年はエルサレム市、ラマツラ市、ピリン村、ベツレヘム市近くのアルマサラ村、プリン村、ナブルス市、ニリン村などに行った。

入国審査所で訪問地を訊ねられて、エルサレム、ベツレヘム、ナザレなど聖地名をあげたが、その聖地近くに訪ねたい所があるので、別に嘘を言ったわけではない。訪ねたかった所の近くに聖地があったのである。

観劇の翌日(4日)、キリスト誕生の地ベツレヘムに。昨年見たので生誕教会には入らなかった。その近郊のアルマサラ村に行く途中で、急遽、昨夜2時に、近くの入植者にガソリンを撒かれ火をつけられたモスクに案内された。モスクの入口の上部がすすで黒くすぶっていて、本棚の上の開かれたコーランが焼けこ

げていた。敷きつめられた絨毯が4分の1くらい焼けている。モスクに入ったのははじめてだが、入口で履物を脱ぎ、正座して頭を床に付けている礼拝者の後ろ姿はかいま見たことがある。

無信仰であるが、他者の信仰の場にはそれなりの礼節ははらう。その場を火を付けて焼くなどは侵害以外の何ものでもない。ユダヤ教のシナゴグに火を付けたら世界はどんなニュースにするだろう。ナチスの再来と大騒ぎになるのは明らかだ。

アルマサラ村を案内してくれた中年の村人の家で、村の抵抗運動のYou Tubeを見せられた。アルマサラ村は周辺を壁や入植地に囲まれていて、占領反対の行動に対して、イスラエル兵が村に銃を持って押し入って来て、両側に家が建っている村道で、無防備の村人に対して催涙弾を水平で撃っていた。足もとで煙があがり、村人は兵士に身体で押し迫っていた。その村人の中にそのパソコンを操作している主人がいる。

You TubeにはPopular Struggle Coordination Committee(人民闘争調整委員会)のページがあり、西岸地区の12の闘争地がリストされていた。Bil'in(Ramallah地区), Nabi Saleh(Ramallah地区), Budrus(Ramallah地区), Ni' iln(Ramallah地区), Burin(Nablus地区), Sheikh Jarrah(東Jerusalem), Jayyous(Qalqilya地区), Silwan(東Jerusalem), The Jordan Valley, South Mount Hebron Hills, alMaasara(Bethlehem地区), Izbet alTabib(Qalqilya地区)である。

ぼくらのグループは関東が7人、関西が3人の計10人なので、2、3人ずつに分宿してホームステイしたが、早朝に通りに出てみると、家の横の畑や空き地にスポンジ被いの飛び跳ねる催涙弾と一緒に、直撃用の円筒形の催涙弾のカラも混じっていた。

パレスチナの車(タクシーやセルビス[乗り合い])の可動範囲は、パレスチナ人地区の東エルサレムのみで、東エルサレムとパレスチナ自治区を行き来できる車、占領地まで行き来できる車などがある。パレスチナ人のドライバーはイスラエルの許可を得ていない地区へは行けない。もちろんイスラエル人はパレスチナ自治区であっても専用車道があるので自由である。

(この車の可動範囲や認可状況などは、M君に訊ねたわけではないので不正確。ぼくはおおよそそんなふうではないかと理解した。)

5日は、ベツレヘム近郊のワインを作っている修道院と帰路にはエルサレム近郊のベートジブリン難民キ

ャンプの手芸品を作っている女性グループを訪問。夜、AIC(the Alternative Information Center)訪問、活動の様子を聞き、パレスチナ問題のDVDを購入する。

6日、48年の建国時からイスラエルに組み込まれている北部のキリスト育成地ナザレにも行った。エルサレムを出て少しして、「デイル・ヤシーン村は近くでは」と聞くと、「すぐ近いが入植地になっていて、まったく痕跡もない」とのことだった。

ナザレに住んでいたパレスチナ人は48年の建国で自動的にイスラエル国民にされて今日に至っている。Wikipediaなどによると、ナザレは「人口65500人。住民の多くはアラブ人(66.7%がイスラム教徒、33%がキリスト教徒)。ナザレは周りのアラブ系村の中心地でもある」とある。

93年設立の婦人たちのフェアトレード団体を訪ねた。

まずこちらの自己紹介からはじまる。たとえば、「パレスチナ連帯をめざす市民団体所属」、「パレスチナ問題に気付き参加した」、「差別などの問題に取り組んでいる」、「パレスチナの産物を消費者に提供したいと思っている生活協同活動のスタッフ」などである。「ぼくはビルの建設現場の現場作業」とNさんが自己紹介すると、みんなが、笑顔で大きくうなずき、「自己紹介までもない」と言わんばかりだった。Nさんは刈り上げの髪からも見るから現場労働者ふうで、さらに首に巻いたタオルが身に付いている。このスタイルは万国共通らしい。Nさんは万人と心を共有する人間力を持った人である。

ナツメヤシの実を取ったあとの房を何度も水洗いして乾かした茎を材料にしてカゴを編んでいる4人のアラブ婦人たちの脇で、メンバーのイスラエル人とアラブ人の二人の女性が話をしてくれた。質問としてどうかと迷ったが、「みなさん同士はイスラエルの占領について話し合ったことはありますか」と質問してみた。質問の直截さに同行の仲間らが一瞬緊張する。イスラエル人の年若い女性が、この女性は創設時からのメンバーとのことだったが、「あります。イスラエル人の女性もパレスチナ人の女性も占領には反対だ。私にとっては大変残念なことだったが、この5月末、45人のイスラエルの女性がここを訪れる予定だったが、ガザ支援船のことが起き、中止になってしまった。イスラエル人とアラブ人が話し合うことが大事だ。知らないは無理解から恐れや暴力につながる」と答えた。優等生的な応答だったが、ぼくはホッとした。いろいろな道の中でも、小さくて遠くて地道だが、確かな歩みを

オリーブの嶺 第102号

感じた。メンバーは12人で、イスラエル人はこの人だけだと聞いた。

ナザレからまっすぐ南下すると数キロでパレスチナ自治区に入られるのだが、道はあっても壁で封鎖されているので、ヨルダン川に向かって50キロほど東南進し、さらに50キロも南下して自治区に入るしかない。

夕方にナブルス近くに着き、近郊の08年にオリーブ摘みとホームステイした農家の主人に会えた。端正な面立ちの40歳くらいの農夫で、英語も本当はヘブライ語も話せるが、知らない喋れない顔をしているのだと言っていたインテリである。一緒にオリーブ摘みをした彼の幼い娘たちは元気だろうか。会いたかったが夕方の村道までは下りて来ていなかった。ホームステイした夜、「暗くなったら、外出しないように」と注意されたことを思い出した。夜はイスラエル兵が村をジープで見回っていて危険なのだという。

08年には1キロ先の山頂の入植者に村の200本のオリーブの木を焼かれたと言っていたが、数日前にまた数百本の木が焼かれたのだと言う。ぼくらがオリーブを摘んだ彼の畑の左側の山頂近くの一角が赤茶けている。声を荒げることもなく、淡々と話す彼の怒りの深さがうかがえる。先祖代々、水の少ない山地で大切に育ててきた樹齢数百年のオリーブの木である。

向かいの山頂の入植地は次のようにしてできたのだと言う。81年に、未耕作の山頂にまず休憩所のようなあずま屋のような建物ができ、やがてその周辺に家が数軒建ち、兵士がその家を守るために駐屯しはじめ、家屋数が次第に増え、兵士の駐屯地が大きくなり、2年もしないうちに山頂が大きな入植地になったのだという。自治区西岸深くを浸食しているこれら入植地は西の占領地イスラエル、入植地同士で道路でつながっていて、もちろんパレスチナ人は通行不可である。そのイスラエル人専用車道はパレスチナ人の土地を奪って造られているのである。



農地を奪い、83%の水を奪い、オリーブの木を焼くイスラエルが、人として長らえるわけではない。生命の元を冒流している人間が、生きられるはずがないではないか。

その夜はナブルスの宿に泊まった。

7日、早朝、宿の向かいの斜面の墓地に登った。墓は1000基ほどある。2メートルと1メートルくらいの平たい墓石に命日にそなえたのかナツメヤシの葉がかけてある。PFLPの旗で飾った青年の写真が立かけてあった。ナブルスは両側200-300メートルくらいの山の間の町で自治区北部の抵抗の町である。墓地上の街角の塀に銃を構えた青年の大きな合成写真のパネルが貼り付けてある。戦死した勇士たちなのだろう。

タクシーに分乗してニリン村に向かう。

両側は200-300メートルの山で、車は中腹の道を走る。左右の山頂にピンク色の屋根の入植者の家屋が固まって整然と並んでいる。

パレスチナ人の家屋はそれぞれの家の周辺に畑があり、家もそれぞれに別々の建て方で、その別様の家が点在して、山の中腹に集落を作っている。日本だと集落は川沿いの谷底にあるが、谷底といっても水流がないせいか、パレスチナの集落は山の中腹にある。水のない谷底に住むより中腹に住んでいる方が、下と上の畑への行き来に便利ということなのだろうか。

谷底から山頂近くまでの段々畑にオリーブの木が植わっている。水の関係か農作業に不便なためか山頂は多くが未耕作地である。

西岸自治区に奥深く浸食しているイスラエルの入植地は、すべてその未耕作の、いわば空き地の山頂を占拠している。

パレスチナ自治政府はヨルダン川西岸全体を領域にしているのではない。A地区と呼ばれる自治政府が行政・治安権を持っているジェニン、ナブルス、ラマッラ、ジェリコ、ベツレヘム、ヘブロン、6つの都市と点在する小地域=完全自治区、B地区と呼ばれるパレスチナ側が行政権をイスラエル側が治安権を持つ=半自治区、C地区と呼ばれるイスラエル側が行政権と治安権を持つ=占領地に分かれる。2000年3月時点であるが、A地区=17.2%、B地区=23.8%、C地区=59%である。その後A・B地区は狭められているからこの%は悪化している。

東エルサレムは67年に合併宣言され、現在パレスチナ人の家屋が破壊され、追い払われつつある。ガザ

地区は2005年にイスラエルが全面撤退したのでいわばA地区に該当するが、ガザ地区全体が封鎖されているので実質は占領地である。

ナブルスからニリン村への道の左右の山頂には、自治区の中央部というのに、ピンク屋根の入植地が続いていた。

ニリン村には昨年も行った。今年は昨年とは別の農家のオリーブ摘みだった。老農夫とその息子と日本人10人で12本のオリーブの実を摘んだ。12人で休み無く摘んで1時間で2本が精一杯である。木の下にビニールシートを敷いて、高枝は木製の三脚梯子に登って実をそのシートに落とす。シートをまくって実を袋に入れて、次の木の下にシートを移動する。木の大きさによるが1本の木の実は10キロくらいだろうか。

農夫は畑の少し先までぼくを連れて行き、これから先に行くといスラエル兵がジープで駆けつけるのだと言う。自分の畑なのである。山の斜面の縦長に白く光っているセンサーを、あそこにも、その先にも、左にも右側にもと指さした。

昨年は、翌日の金曜日はビリン村のデモに参加する予定だったので、そのことを話すと、オリーブを摘んだ農家の主人の甥っ子は、ぼくらの不参加を悲しそうな顔で聞いていた。今年は別の農家のオリーブ摘みだったが、ホームステイは昨年の農家の新購入したマンションで、その大学生の甥っ子もパソコンを持ってきて、ニリン村の抗議の様子をYouTubeで見せてくれた。村までイスラエル兵が、おそらくデモ参加者を逮捕に押しかけて来ている。07年から今年までに下は15歳からの死者が5人、負傷者が700人だかいて、明日は外国人のサポーターが少ないと言う。甥っ子はそんな説明をしながら、脚を小刻みに揺すっていた。ぼくは思わず視線を反らせたが、ほんとうは青年は床を踏み鳴らしかつたのではないか。

翌日(8日)、ぼくらだけだったと心配したが、丘の頂の集会場所には200人くらいの人が集まっていた。昨日のオリーブ農家の息子もいて笑顔で挨拶を交わした。しかしデモになると40人ほどになり、付いて行くつもりはぼくら10人が主軸になった。ぼくは昨年、イスラエルが奪って壁を作りかけているこのオリーブ畑の斜面を見て知っているので、ビリン村のデモコースよりもニリン村のコースの方がきついとわかっていて。ビリン村の退路コースは下りだが、ニリン村は登りの段々畑の道を退かなくてはならない。

ビリンで覚えた「Occupation no more!」と叫ぶ。

情けないことに相変わらずの金切り声である。と、マイクを持った青年がマイクを渡そうとする。手を振って断った。20メートル先のコンクリート壁の向こう側のコンクリート製の詰所の陰にイスラエル兵がいる。しばらくはシュプレヒコールと投石とにらみ合いが続く。後で気付くと、風向きが変わった瞬時に、催涙ガス弾が近くで跳ねた。前だけでなく退路のはるか上方の斜面にも白煙が上がって、退路を覆っている。まともに吸ってしまい、目も涙で見えない。「来た!速く」と誰かが叫ぶ。閉じていた壁を開けてイスラエル兵がこちら側に現れたのだ。四つんばいになって斜面を駆け登る。赤新月社の人々が渡してくれたアルコールを含んだ脱脂綿どころではない。誰かがバッグと手に持っていた夏スーツを持ってくれた。石混じりのデコボコの坂道を息を切らせてよたよた登りながら、だからニリンはビリンよりきつと思ったのにと思った。

甥っ子も仲間数人と一緒だったが、彼らは石を投げたりしないで、ただ一緒にいただけだった。村にまで押しかけてくるのだから、白昼は静かにしているといったことと理解した。家族で日常を村で過ごしている彼らのそれは正しい。

斜面を登り切って心地付いた頃、日本語でもいいから、せめて「ドロボー! 出て行け!」と叫べばよかったと思ったが後の祭りである。

9日は死海に行った。10日は旧市街観光。

11日、西岸の自治区しか知らないで、M君が商用で行くというテルアビブ行きに同行した。東エルサレムのバス停でイスラエル人地区の西エルサレム行きに乗る。西エルサレムは通りが広く緑が多いがコンクリート建物でどこかよそよそしい。足下までの長い裾の衣装で颯爽と歩くパレスチナの女性に慣れた目には、ジーンズやスカートのイスラエルの女性たちはちまちまとして貧弱に見える。顔も彫り深いパレスチナ女性がいい。

占領地に行くバス発着場が入っているビルに入るのに持ち物検査器を通る。銃を抱えた草色や水色や焦げ茶色の軍服の若い男女がやたらに多い。ユダヤ教の休日である土曜日を利用しての帰郷からの帰隊中なのだろうか。休日の外出時にも銃所持なのか。自動小銃には慣れたとはいえ、デパートの人混みの中での自動小銃携帯はやはり異常な風景である。

エルサレムを出てしばらくすると道は下り坂になる。耳の奥が詰まって音が遠ざかり、バスが高台から下つ

ていることがわかる。左右の山地がとぎれ平野をバスは1時間ほどひた走った。

テルアビブは19世紀末から、ユダヤ人移民がまずたどり着いた港湾都市で、早くからユダヤ人の町である。その南に隣接したアラブ人住区のヤッファがあり、そこに行くバスに乗る。渋滞を抜けたところで、向かい合わせの席に50歳前後の婦人が座った。金属製の木の葉を鎖につないだ何本かのネックレスと両手首にいくつものプレスレットをはめていて、顔立ちはギリシア人女優のメルナ・メルクーリを思い出させる。ネックレスの木の葉は柳の葉よりもやや幅広いオリーブの葉やナツメヤシの葉がモチーフだろう。

潮の香りがしてそこが終点だった。コーヒーとサンドイッチを買って、訊ねるまでもなく坂道を登ると、20メートルほど下に海が、地中海が目の下に広がっていた。白波が砂浜に打ち寄せている。サンドイッチを食べコーヒーを飲み写真を撮った。北に高層ビルが並ぶテルアビブが近い。

パレスチナ自治区のガザ地区は海岸沿いだが、ガザ支援船が接岸を阻止されたのでご存じのように、沖合はイスラエル海軍に封鎖されていて、パレスチナに本当の海はない。平和ならこの海で子どもたちは泳ぐだろうと思った。その海の高台には20分もいたのだろうか。

移動先にはタクシーしかない。街角に出る寸前の狭い通りで、バスで前に座ったメルナ・メルクーリがコーヒー店から出て来て、目が合うと訊ね目顔で近寄ってきた。M君がタクシー乗り場を訊ねると付いて来いと素振りと言う。M君が「すばらしいネックレスですね」と言うと、「アクセサリデザイナーだ」と言った。彼女が通りかかったタクシーと交渉してくれ、ぼくらは楽々と車に乗れた。声はハスキーでそれもメルナ・メルクーリに似ていた。

そんな偶然の短い分だけ強く記憶に残る幸運にも出会い、パレスチナの海岸部が平野であることを見たのである。

テルアビブから帰って夕食後、旧市街の宿の玄関前のテラスで、ナザレ近くからアルアクサ・モスクにお参りに来ているモスレムの老人、と言ってもぼくよりも若い、と話をした。もちろんM君の通訳付きである。言葉がないのは悲しい。

それから、ぼくは友人を誘ってビール探しで宿を出た。宿の注意書きに“アルコール禁”とあるのでザックの中のワインはダメである。ダマスカス門を出よう

として近くまで行って、呼びかけられた気がして見た目に“Cold Beer”という店の張り紙の文字が飛び込んできた。イスラエルのビール他にタイベ村のビールもある。10シケル(イスラエルとパレスチナ通貨で250円くらい)でタイベ村で飲んだビールが、ランクが落ち生でないがビンで4・5ユーロ(550円)とある。何日ぶりだろうか、ランクと値段は不問である。

悪乗りして店前で警備していた二十歳前後の3人のイスラエル兵に写真の許可を求めた。3人を撮りついでに「I love peace」と言ってやった。一人はうなずいたが、他の二人は言葉を理解できないふうを装った。この二人にはぼくの批判が通じたということだろう。

店の名前はCAFÉ Rimón Himoという。ダマスカス門を入れてすぐを道なりに右折し、右側の4軒目ほどの、店先にテラステーブルがある店である。おそらくこの店の前を通る70%はパレスチナ人、30%はユダヤ人とキリスト教徒だろう。そこで値段をシケルでもドルでもないユーロ表示しかしていないところに、店の主人の何かの意思を感じた。

ベッドに入って眠ったが途中で目が冴えて眠れない。老人との会話を思い出して、メモを取ろうと起きだしてロビーに行くと、老人もロビーにいてコーランを小声で唱っていた。メモをしていると、彼はぼくにミカンを持ってきて、目顔ですすめてくれた。名刺を渡し、名前をアラビア語でノートに書いてもらった。スリーマン ムハンマド ソーレーヘーというのだそうだ。スリーマン氏がくれたミカンは味の濃いミカンだった。

テラスでスリーマン氏と夕方、「ぼくらは明日、アンマン経由で帰国する。パレスチナ滞在中でとても気になっていたことがある。それはパレスチナの子どもたちのことだ。未来について、子どもたちは困難を感じているだろうと思うと心痛む。しかし、各地で会ったあなたたち大人のイスラエルに立ち向かっている姿を見て安心もした。その毅然とした大人の、悪と対峙している姿は、子どもたちに希望をもたらすだろうと思う。悪に服従してしまうと、子どもは未来に希望が持てなくなってしまいうだろうが、あなたたちの姿は子どもたちの未来を開くことにつながると思う。パレスチナは60余年を経ている。ぼくはたかだかその60余年の中の10日間のパレスチナの滞在者でしかない、僭越なのですが、そう思いました」といった趣旨の会話を交わしたのだ。

「パレスチナのあなたたちが、不正であっても強い者が勝つということ、身をもって否定しているの、

もしまだあるとすればだが、人間の尊厳が保持されているのだ」と言いたかったが、うまく言えなかった。彼は詰まりながら話すほどの苛立った訥弁を暖かい笑顔で包んでくれた。

こんな会話のメモを取ってベッドに行き、眠りかけた頃、静かにドアが開き、老人が帰ってきて(気付かなかったのだが同室だった)、また静かに部屋を出た。しばらくしてアザーン(祈りの誘い)の音が聞こえた。老人はアルアクサ・モスクに行ったのだろう。

60余年の毎日の朝晩である。オリーブの木を焼かれ、農地を奪われ、削り取られ、どこに居ても銃を持

った兵士に証明書の提出を強要され、誰何されるのである。しかし耐えて子どもを育て、オリーブの木に拠って生活しているのである。パレスチナの不条理は、パレスチナの人たちの関知しないことから始まっている。世界はこの不公正を未解決でありながら、民主主義だとか国際平和だとか言っている。

パレスチナは重い。辛い。しかし、ニダールさんやその妻のマイスーン、劇場前で囲んでくれた少女でなくとも少女たち、メルナ・メルクーリやスリーマン氏に会いに、何もできない自らの慰めでしかないかもしれないが、またパレスチナに行こう。

無罪宣告

辻 邦

「国家権力に逆らった奴の末路はこうなるのだ!」という警告だということだ。

■国際社会の厳しい眼差し

2008年12月末から09年1月末まで続いた、イスラエル軍によるガザ地区への猛攻は記憶に新しい。パレスチナ人犠牲者は1600人弱で、半数以上は女性と子どもたちだった。対するシオニスト側の犠牲者は13人。大半が軍人だった。また最近でも、5月31日に、イスラエル海軍がガザへの救援物資を積んだ『ガザ支援船団』の船舶を攻撃し、民間人を虐殺し、船を拿捕・曳航した蛮行は記憶に新しい。この攻撃は公海上で遂行されており、明らかな国際法に違反する海賊的な犯罪だ。もっともイスラエル軍による犯罪は、パレスチナ全土で日常茶飯事に行なわれている。そしてこの犯罪国家の後ろ盾が、年間30億ドル以上の無償援助をイスラエルに与え、最新兵器を供与し、好条件での借金を続けている、「自称・世界の警察」アメリカ合州国だ。

かつて、重信氏がレバノンに滞在していた1982年6月、イスラエル軍がレバノンに侵攻した。その圧倒的な軍事力の前にPLOは敗走し、首都ベイルートは廃墟と化した。この時、間一髪で重信氏は逃げのびることができたが、サブラ・シャティーラのパレスチナ難民キャンプでは、イスラエル軍による完全包囲の下、イスラエルの傀儡であるキリスト教徒右派民兵が3000人以上の難民を殺しまくった。この時、イスラエル軍の指揮を取ったのは、当時の国防大臣アリエル・シャロンだ。その後、この男は首相となり、パレ

■不当判決

「本件上告を棄却する。当審における未決拘留日数中810日を本刑に算入する」

7月15日、最高裁判所は重信房子氏に対して、上記の決定を下した。

重信氏が、1974年9月13日にPFLPが実行した『ハーグ事件(ハーグ闘争)』の共謀共同正犯として起日本政府の顔に泥を塗りたくった重信房子を重刑にし、娑婆には出さない」という国家の方針に基づいた、結論ありきの裁判だということだ。同時にこの裁判は、訴され、一審の東京地裁での懲役20年の判決に対して控訴するも、二審の東京高裁で控訴棄却となり、さらに最高裁に上告していたことは周知のとおりだ。

『ハーグ事件』事件がPFLPの作戦なのか、あるいは日本赤軍の主体的作戦だったのか、また当時、実態としての日本赤軍が存在していたのか否か、ということなどが大きな争点となったが、検察側は、重信氏は現場にはいなかったものの、「赤軍最高幹部」として中心的役割を担ったと断定し、「共謀共同正犯」で起訴した。

私は法律の専門家ではないが、この裁判が、国家権力の意思によって遂行された政治裁判であり、「国家理性」に従った国策裁判であると捉えている。簡単に言えば、「米国やイスラエル、欧州諸国のメンツを傷つけ、日本政府の顔に泥を塗りたくった重信房子を重刑にし、娑婆には出さない」という国家の方針に基づいた、結論ありきの裁判だということだ。同時にこの裁判は、見せしめ裁判的側面を持っていると言える。つまり、

オリーブの樹 第102号

スチナ侵略・難民虐殺を遂行した。その中でも、2002年のヨルダン川西岸地区への侵攻は特に有名だ。この時、アラファト・パレスチナ自治政府議長軟禁や、ベツレヘム生誕教会包囲、ジェニン虐殺事件などが起こり、イスラエル軍の暴虐と無法に世界が恐怖した。

その後もイスラエルは、ジュネーブ条約で厳禁されている占領地の現状改変を遂行し続け、「入植地」という名の植民地を建設し、“国境”を越えてパレスチナ人の土地を奪う分離壁を造り、ガザ地区を包囲して「天井なき牢獄」にしている。

ここで疑問に思うことがある。日本政府、旧与党の自民・公明党、現与の党民主党の各議員や日本の裁判官が、こうしたイスラエルの暴虐を知らないはずがない。だとしたら、なぜ日本の司法当局は、イスラエルの犯罪を告発しないのだろうか。

2003年2月、ベルギー最高裁は、シャロンをパレスチナ難民虐殺の責任者として生存者らが告訴した裁判で、「国外の被告も訴追できる」と判示した。他にも、ガザ大規模攻撃の責任者として、イギリス司法当局がイスラエル元外相ツイピ・リブニらの訴追の可能性を示唆し、イスラエル高官の海外渡航自粛が続くなど、国際世論のイスラエルを見る眼差しは、厳しさを増しているというのに。

残念ながら、米国の忠実な子分である日本政府は、主人に異を唱えるほど自立的でもないし、誇り高くもないということか。

■「私を断罪せよ」

2003年3月、米国のイラク侵略が開始されよう

とする日、一人のアラブ人女性が来日した。

ライラ・ハリッド——パレスチナ国会議員であり、PFLPの戦士として数々の作戦に参加し、“ハイジャックの女王”と讃えられた女傑だ。彼女は旧友・重信氏の裁判の被告側証人として法廷に立つため、ヨルダンから来日した。

「マリアン（重信氏の愛称）はハーグ事件のみならず、私たちの軍事闘争には一切関係していません」と証言した彼女は、こうも言った。「もしマリアンがテロリストなら、私もテロリストです。そして同胞パレスチナ人全員がテロリストです。でもそれは違います。私たちは自由の闘士であり、平和を愛し平和に暮らしたいと願っている民です」

私も彼女の主張に賛同する。パレスチナの地で暴虐に泣く民の友として闘い続けてきた人物が、何故いま祖国でテロリストの汚名を着せられて、不当極まりない裁判を受けねばならないのか？むしろテロリストの称号は、恥ずべき戦争の遂行者・支持者であるブッシュ、ブレア、小泉、シャロン、ベギン、リブニ、ネタニヤフらにこそふさわしいだろう。

かつてキューバ革命の最高指導者フィデル・カストロは、独裁者バチスタへの反乱に失敗し、たった一人で法廷に立って自己を弁護した。その記録は、今読んでも格調高く、誇りに満ちた内容だ。そしてそのフィデルの高貴な精神は、ライラや重信氏にも通じるものだと思う。その結語を示して拙文を終わりたい。

「私を断罪せよ、それは問題ではない。

歴史は私に無罪を宣告するであろう！」

後記

重信さんは、9月29日に急遽八王子医療刑務所に移監になりました。11月1日現在の重信さんの通信・差入れ・面会の条件は以下です。

- ・重信さんからの通信は月4通、1通便箋7枚。（宛先は姉上、弁護士です）
- ・重信さん宛の通信は制限なし。ただし私信以外（パンフ、写真など）は本人入手は約1週間後。
- ・差入れは、本は一度に3冊以内。（読み終えた雑誌週刊誌小説時代小説まじめな本何でも送って下さいとのこと。ただし礼状などは差上げられないとのこと。単行本は宅下げ可能だが、雑誌などは破棄になる）3冊を越えると超過分は発送者の返送料負担か破棄。宛先は、〒192-0904 東京都八王子市市安町3-26-1 重信房子 です。
- ・面会は親族のみ。月2回。

皆様からのお便りは、重信さんへの暖かな励ましになります。どうかよろしくお願いします。 Y

連絡先 〒105-0004 東京都港区新橋2-8-16 石田ビル4階

救援連絡センター気付 「重信房子さんを支える会」

郵便振替 00110-4-613941 オリーブの樹

銀行口座 三井住友銀行 赤羽支店 226-3687269 オリーブの樹

www.geocities.jp/setfreemarian/index.html

頒布価格 500円

「正誤」表

第102号

- ①2P(短歌)一首目 十三夜捜して立ち入る→立ち居る
- ②2P(短歌)三首目 自由の旅再開誓いて→再会誓いて
- ③4P左22行目 ハーブ→ハーグ
- ④8P左下から17行目 担当医は 50代の人→～40代の人
- ⑤9P右30行～31行目 「アラブ時代に資本主義の政策論争を知る一つの資料そしてずっと読んでいたものです」 →としてずっと(修正)
11行目「～アンソロジーNO32」届きました→(後に全文移動)
- ⑥11P左上から6行目 _____に聞いていました。→ていねいに聞いていました。
- ⑦12P(11/1)右上から5行目 2.8センチの→28センチの
- ⑧14P右上から6行～7行目 詩人マフムター
→詩人マフムード・ダルウィーシュが眠るラマツラの丘の上の文化センター(欠落分挿入)
- ⑨19P「無罪宣言」左上から8行～11行目
→「日本政府の顔に泥を塗りたくった～裁判だということだ。同時にこの裁判は」
(重複のため削除)